

うち だ とも ひろ
内 田 知 宏

学位の種類 博士（教育学）
学位記番号 教博 第 124 号
学位授与年月日 平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当
研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
総合教育科学専攻
学位論文題目 精神病発症危険群「アットリスク精神状態」における
心理・認知的要因に関する臨床研究
論文審査委員 （主査）
教授 上 埜 高 志 准教授 安 保 英 勇
准教授 加 藤 道 代

〈論文内容の要旨〉

本研究は、統合失調症をはじめとした精神病の早期発見・早期介入という観点から、その発症危険群として概念化されたアットリスク精神状態（At Risk Mental State、ARMS）を対象として、その心理・認知的要因について詳細に検討したものである。本研究でいう精神病とは、明らかな幻覚、妄想、行動や会話の解体などの精神病性の症状が一定期間、持続するものを指し、ARMS は、精神病を発症する前の時期（前駆期）に該当すると考えられ、軽い妄想や幻覚といった微弱的な精神病性の症状によって特徴づけられている。本論文は、第Ⅰ部背景、第Ⅱ部研究、第Ⅲ部総合考察から構成されている。

第Ⅰ部では、本研究に関する学術的背景についてまとめ、本研究の目的を示した。

現在、欧米豪を中心に、精神病とくに統合失調症に対する早期発見・早期介入の取り組みが盛んに行われている。統合失調症をはじめとした精神病の発症危険群を ARMS という枠組みでとらえ、できるだけ早く適切に評価し、集中的・包括的な治療的介入を実施し、後々の悪化を予防することが重要であるという考えが支持されるようになってきている。ARMS という概念が提唱されたことによって、精神病の発症前後に焦点を当てた研究がここ数年で飛躍的に発展しつつある。そこで、本研究は心理学的な観点から ARMS について検討していくことを試みた。ARMS の心

理・認知的要因として、認知的洞察 (cognitive insight)、自尊感情 (self esteem)、および自己・他者スキーマ (schema) の3つの変数を取り上げ、ARMSにおける心理・認知的要因の特徴を明らかにすることを目的とした。さらに、こうした心理・認知的要因の特徴とARMSで体験される精神症状との関連についても検討することも目的とした。

第Ⅱ部は、本研究で行われた研究の詳細を示した。

研究の第1段階では、心理・認知的要因の指標としてベック認知的洞察尺度 (Beck Cognitive Insight Scale, BCIS)、ローゼンバーグ自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale, RSES)、および簡易中核スキーマ尺度 (Brief Core Schema Scale, BCSS) を取り上げ、日本における有用性について検討した。BCISについては、183名の健常大学生および30名の統合失調症患者を対象に実施した。RSESおよびBCSSについては、それぞれ329名、266名の健常大学生を対象に実施した。分析の結果、これらの3つの尺度は信頼性・妥当性を備えており、日本においても適用可能な尺度であることが示された。

研究の第2段階として、BCIS、RSES、BCSSをARMSの患者47名に実施し、精神病の発症危険段階における心理・認知的要因の特徴を明らかにすることを試みた。まず、認知的洞察、自尊感情、自己・他者スキーマそれぞれについて、健常者、ARMS、そして初回エピソード精神病患者の3群における各尺度の得点を比較した。これら3群の状態の違いによって、患者の心理・認知的要因がどのように異なるかを明らかにすることで、患者が抱える問題が発症後に特徴的な問題であるか、あるいはその発症危険群にも認められる問題なのかを検討した。その結果、ARMSは、①自己の体験や信念に対する考え方や捉え方が硬い、②自尊感情が低下している、③自己や他者に対するネガティブなスキーマが高い、といった心理・認知的な特徴をもっていることが示された。

さらに、本研究では、ARMSにおける認知的洞察、自尊感情、自己・他者スキーマといった心理・認知的要因と精神症状との関連について検討した。その結果、ARMSでは、自己確信性や他者に対するネガティブなスキーマといった心理・認知的要因が微弱な陽性症状と関連していることが明らかになった。一方、自己スキーマや自尊感情といった要因は、情動的ひきこもり、受動性／意欲低下による社会的ひきこもりといった陰性症状と関連することが示され、ARMSにおける社会機能の低下に影響していることがうかがわれた。

第Ⅲ部では、本研究で得られた結果について、総合的に考察した。

認知的洞察、自尊感情、自己・他者スキーマの3変数を測定する上で、BCIS、RSES、BCSSが信頼性・妥当性を有していることを確認した。これらの尺度は、患者の心理・認知的要因の理解を助けるものであり、加えて、認知行動療法をはじめとした治療的介入の効果指標として幅広く使用されることが期待される。さらに、ARMSを対象とした研究結果からは、ARMSに対して心

理的介入を行う際に、自己の信念や体験に対する固さを和らげるようなアプローチ、または、他者に対するネガティブなスキーマを扱っていくことが精神病性の症状を改善する上で有益であることが示唆された。一方、自己スキーマや、自尊感情は ARMS における社会機能の低下に影響していることがうかがわれた。こうした問題に対し、社会機能の改善に向けた実際的な支援と心理的な介入を並行して行っていく必要性も考えられた。

結論として、本研究で、ARMS における心理・認知的要因を明らかにしたことで、認知行動療法をはじめとした心理的介入の手かかりについての知見を得ることができた。こうした本研究の試みは、日本における精神病の早期発見・早期介入に一定の貢献ができた。

〈論文審査の結果の要旨〉

精神病とくに統合失調症については、過去において診断がつくものの、有効な治療法がない時代が長くつづいたが、1950 年代以降、薬物療法などの治療法が着実に発展してきた。現在、がんなどの身体病では早期発見・早期治療の取組みがなされ成果を上げており、感染症や生活習慣病などでは予防の重要性も指摘されている。精神病については、1990 年代後半ころから欧米豪において早期発見・早期介入の先進的な取組みが行われている。精神病発症の前駆期に該当すると考えられ、微弱な精神病性の症状によって特徴づけられて、発症危険群として概念化されたアットリスク精神状態 (At Risk Mental State, ARMS) を対象としている。翻って、日本においても、生物-心理-社会モデルの導入、心理社会的アプローチの進展、精神分裂病から統合失調症への名称変更、新薬の開発など、悲観的な精神病治療観から脱却しつつあるなか、精神病への早期発見・早期介入の試みが注目されている。このような研究動向のなか、本研究はこの ARMS の心理・認知的要因について、先駆的に心理学の立場から詳細に検討したものである。

本研究の第 1 段階では、心理・認知的要因の指標としてベック認知的洞察尺度 (Beck Cognitive Insight Scale, BCIS)、ローゼンバーグ自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale, RSES) および簡易中核スキーマ尺度 (Brief Core Schema Scale, BCSS) について日本における有用性を検討し、その結果、各尺度の信頼性・妥当性が確認された。

第 2 段階では、有用性の確認された尺度 BCIS、RSES、BCSS を ARMS、初回エピソード精神病患者、健常者に実施し、心理・認知的要因について比較検討した。その結果、ARMS は、①自己の体験や信念に対する考え方や捉え方が硬い、②自尊感情が低下している、③自己や他者に対するネガティブなスキーマが高い、という心理・認知的な特徴が示された。また、ARMS では、自己確信性や他者に対するネガティブなスキーマが微弱な陽性症状と関連していることが明らか

になった。一方、自己スキーマや自尊感情は、情動的ひきこもり、受動性／意欲低下による社会的ひきこもりといった陰性症状と関連することが示され、社会機能の低下に影響していることがわかった。

このように、本研究は、心理・認知的要因を評価するための BCIS、RSES、BCSS の各尺度の意義を確立し、ついで、これらの尺度を用いて ARMS の心理・認知的な特徴およびその精神症状との関連を明らかにした。本研究の限界として、つぎの点が指摘される。横断研究であり、ARMS の精神病発症メカニズムの解明には至っておらず、縦断研究が求められる。対象者が主に思春期・青年期の若年者であるため、発達心理学的な検討が望まれる。

いずれの指摘も、精神病発症メカニズムの解明のような大きなテーマ研究における、先駆的な研究としては今後の課題ということができ、これからの研究を進めるにあたって評価尺度の有用性が確立でき、ARMS の心理・認知的要因を明らかにできたことは、斯界に大きく貢献できたものと認めることができる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。